

夫婦関係が母親の子育て認知を介して養育行動に与える影響

森 川 夏 乃*

問題と目的

親の養育行動は、子どもの抑うつ (McLeod, Weisz, & Wood, 2007; 菅原ら, 2002) や反社会的行動 (Carlo et al., 2011)、学業成績や問題行動 (Amato & Fowler, 2002; Gadeyne, Ghesquière, & Onghena, 2004)、社会的スキル (戸ヶ崎・坂野, 1997) 等、様々な側面に関連することが指摘されている。概ね、受容的・共感的な養育行動は子どもへのポジティブな影響、拒否的・統制的・厳格な養育行動は子どもへのネガティブな影響があることが示されており、子どもの健全な心身の発達において、適切な養育行動が求められる。本研究では、母親の養育行動へ影響する要因について、夫婦関係と子育てに対する認知の点から検討を行う。

1. 夫婦関係と養育行動

母親の養育行動に関連する要因として、夫婦関係との関連が指摘されている。菅原ら (2002) は、父親・母親・子どもに対して調査を行い、母親から父親への愛情は、母親の養育の暖かさを介して子どもの抑うつに影響することを指摘している。また、夫婦関係と親子関係の関連を扱った研究のメタ分析の結果からは、夫婦間葛藤は厳格なしつけと援助・受容に影響することが示されており、夫婦間での不快や敵意のあるやりとりをすることは親子の関係性も機能的に不全にするというスピルオーバー仮説が指示されている (Krishnakumar & Buchler, 2000)。同様に、氏家ら (2010) は、両親の夫婦間葛藤は、両親の養育における暖かさを弱め、冷たさを強めることを指摘している。そして、子どもがその親行動をどのように認知するかが子どもの抑うつ症状に影響するとされる。堀口 (2006) は、父親と母親に調査を実施し、夫婦関係満足度も、あたたか

さ・受容的な養育態度と厳格なしつけ・非受容的な養育態度とに関連があることを指摘している。加えて、夫婦関係満足度は夫婦間の子育て協力を介して子どもへの情緒的サポートや子どもの行動のコントロールに影響すること、一方で夫婦関係満足度は夫婦間葛藤を介して子どもへの拒絶を高めることが示されている (Pedro, Ribeiro, & Shelton, 2012)。このように、夫婦間の葛藤や低い満足度は、子どもへの厳格なしつけや拒否的・非受容的な態度を高めること、愛情のある夫婦関係は子どもへの支持的・受容的な態度を高めることが指摘されている。

またこれらの養育行動以外に、母親が子どもに干渉し過ぎる過干渉という養育行動も見られる。親の過干渉は、子どもの臨床的問題との関連が指摘されており (例えば土居・三宅, 2018)、先述した養育行動に加え、過干渉が生じるメカニズムについても検討が必要であろう。

2. 母親の認知と養育行動

養育行動に影響する要因として、母親の認知面にも着目がなされている。特に不適切な養育における特有の認知過程があることが明らかにされてきた。例えば、子どもに対する親の身体的攻撃の発生に至る過程について、社会的情報処理理論 (Social Information Processing theory) では、3段階の認知過程と、それに続く、反応の実行とモニタリングにより説明している (Milner, 1993)。社会的情報処理理論に基づき、親の子どもに対する身体的攻撃行動に影響する認知過程として、母親の共感性の低さに加え、子どもの行動の否定的解釈や内的特性に原因帰属をすること、子どもに対する不適切な発達期待があることが指摘されており

(例えば Dadds et al., 2003; McElroy & Rodriguez, 2008; Rodriguez, Silvia, & Gaskin, 2019)、子どもの行動や反応に関する否定的な解釈や期待段階における認知の影響が示されている。こうした認知的要因は、感情的要因よりも不適切な養育のリスクを説明することも指摘されている (Haskett et al., 2003)。さらに中谷 (2016) は、母親の原因帰属及び感情に着目し、子育てにおける対処可能性の低さが怒り・嫌悪を高めることで不適切な養育に影響することを示している。このように、母親が子どもの行動をどう認知するかが、その後の養育行動に作用することが示されており、その影響も大きいことから、母親の認知的側面も無視できない。

では、親の認知は、夫婦関係とはどのように関連しているのだろうか。例えば、夫婦間の葛藤や苦痛を感じている妻は、夫の否定的な行動を想起したり注意を向けやすくなるなどのネガティブなバイアスが働いており、肯定的な出来事は無視または最小化する認知傾向を示す (Halford, Osgarby, & Keefer, 2002; Sillars et al., 2000)。また、夫婦関係満足度の低さは、怒りや軽蔑、支配と要求といった敵意の高さや、問題の説明をしたり建設的な解決策を提案するといった問題解決的なやり取りの低さ、ユーモアや肯定的な感情の低さと関連があることが指摘されている (Woodin, 2011)。すなわち、夫婦関係が良好ではない場合、行動や出来事への否定的解釈が生じ、建設的な問題への対処も行われなくなるといえるだろう。上述したように、葛藤のあるいは満足度の低い夫婦関係と否定的な養育行動との関連も踏まえると、夫婦関係が母親の認知的側面に影響し、否定的な認知が働いたり問題に対処がなされなくなることで、否定的な養育行動につながるものが推察される。また難波・田中 (1999) は、夫との葛藤度が高い妻は、サポートの効果が得られにくいことを示唆している。すなわち、夫婦間に葛藤がある状況においては、母親は父親の行動を否定的に認知しており、それにより父親からのサポートの効果を実感として得にくく、一人で子育てに当たっている感覚となっていることが推察される。父親からのサポートは母親の育児負担感を軽減すること (荒牧・無藤, 2008) から、父親からのサポートの効果が無い状態とは、母親が大きな育児負担感を抱えている状態と推察される。そして孤立感を抱えている母親は育児に対する否定的感情があることも指摘されている (上田, 2007)。

以上のことから、夫婦関係の不良さは、母親の子育てに対する心理的困難感を高め、否定的な養育行動に

至ることが考えられる。しかし、夫婦関係と養育行動との関連について認知的変数を想定した研究はあまり見られない。母親への認知的介入による養育行動の改善が報告されている (Bugental et al., 2002) が、時として介入を行っても十分な認知変容が生じないなどの課題も臨床場面では見られる。認知的変数の背景として夫婦関係を想定することで、認知面だけでなく、家族関係の調整も同時に行うことにより、養育行動の変容がより生じやすくなると考えられる。

3. 本研究の目的

よって、本研究では、夫婦関係が母親の子育てに関する認知を介して養育行動に与える影響について検討を行う。上述したように、夫婦関係の不良さは、母親の夫に対する否定的認知を生じさせたり、サポート効果の少なさを生み、家庭内で心理的に孤立し子育ての困難感が高まることが考えられる。そして子育ての困難感が高い、すなわち子育てへの対処可能性が低く感じられることで、否定的な養育行動へ影響すると考えることができる。

こうした子育ての困難感を高く評価したり、対処できないと感じている認知を測定する尺度として、思考の制御困難性 (杉浦, 2002) を用いる。ストレス事態が生じた際、対処しようとする能動性と制御困難性が共存し心配が生じるとされる (杉浦, 2001)。杉浦 (2001) は、対人状況は評価状況と比して、対処方略のストレス低減効果は低く、思考の制御困難性は強い傾向にあることを指摘している。これは、対人状況の方が評価状況よりも、脅威性が強くコントロール可能性が低く評価されることで、解決困難でより脅威的であると考えられるため、対処方略のストレス低減効果が低く思考の制御困難性がより強いと考察されている。したがって、夫婦関係の在り方により、問題の脅威性が強くコントロール可能性が低く評価されると、思考の制御困難性が高まることが考えられる。

また、夫婦関係の測定は、夫婦間のコミュニケーション態度 (中釜・柏木, 2001) に着目する。夫婦間のコミュニケーションに着目することで、家族内のどのような関わりの中で養育行動に影響があるかを明らかにする。また、養育行動は、支持的、受容的、拒否的、叱責等に加え、過干渉も測定することができる肯定的・否定的養育行動尺度 (伊藤ら, 2014) を用いることとする。以上より、夫婦間のコミュニケーション態度が思考の制御困難性を介して養育行動に影響しているという仮説モデルを設定し、このモデルの検証を

行う。そして、親の認知を介し、夫婦関係が養育行動に至るプロセスを明らかにする。

加えて、子どもの年齢により家族関係は異なる (McGoldrick, Garcia, & Carter, 2016)。それゆえ、本研究では、児童期の子どもを持つ時期の家族と、青年期の子どもを持つ時期の家族を対象とし、モデルの比較を行う。

方法

1. 手続きおよび協力者

株式会社マクロミルに依頼し、夫と子どもと同居しており、第1子が小学生1～3年生の母親（以下、小学生群）と、第1子が中学1～3年生の母親（以下、中学生群）をスクリーニングにより抽出し、ウェブ調査を実施した。

調査協力者は、小学生群309名と、中学生群309名の計618名であった。調査協力者にデータの欠損が見られなかったため、618名すべてのデータを分析に使用した。

2. 倫理的配慮

本調査は強制ではないこと、不快を感じる事等があった場合には回答を途中で中断することができ、その場合にも協力者が不利益を被ることはないこと、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないことを最初のページにて文面で説明した。そして、それらに同意した上で質問に回答するよう提示し、質問紙への自発的参加、守秘義務について協力者が同意した上で実施された。

3. 質問紙の構成

質問紙の構成は以下のとおりである。

(1) 基礎情報：スクリーニングの段階で、調査対象者の性別、年齢、婚姻状態、小学1～3年生あるいは中学1～3年生の第1子の有無、同居家族について尋ねた。そして夫と子どもと同居しており、第1子が小学1～3年生の母親、及び第1子が中学1～3年生の母親という条件に合致したものに対して、本調査において、子どもの学年、子どもの性別について尋ねた。

(2) 夫婦間のコミュニケーション：平山・柏木 (2001) による夫婦間コミュニケーション態度の尺度を用いた。夫から妻あるいは妻から夫へのコミュニケーション態度を測定しており、「威圧」、「共感」、「依存・接近」、「無視・回避」の4因子22項目から成る。「威圧」は、「命令口調で言う」などの相手より上位の立場を取り相手を押さえつける態度を示す項目か

ら成る。「共感」は、「親身になっていっしょに考える」といった相手の立場や気持ちに寄り添う態度を示す項目から成る。「依存・接近」は、「悩み・迷い事があると相談する」といった相手に対する従順さや依存的な態度を示す項目から成る。「無視・回避」は、「いい加減な相づちをうつ」といった相手のとのコミュニケーションを避けたり無視したりする態度を示す項目から成る。回答は、「1全くない」から「4よくある」の4件法で求めた。

(3) 親の養育行動：肯定的・否定的養育行動尺度 (伊藤ら, 2014) を用いた。子どもに対する親の養育行動を包括的に問う35項目から成る。肯定的養育である「関与・見守り」(例「子どもと一緒に遊んだり、楽しいことをする」)、「肯定的応答性」(例「おもしろいことを子どもと一緒に笑う」)、「意思の尊重」(例「できるだけ子ども自身の意思を尊重する」)と、否定的養育である「過干渉」(例「自分がいないと、子どもは何もできないと感じる」)、「非一貫性」(「個人的なイライラを子どもにぶつけてしまうときがある」)、「厳しい叱責・体罰」(「子どもが言うことを聞かないとき、頭に血が昇り、冷静さを失う」)の6因子で構成されている。回答は、「1ない・ほとんどない」から「4非常によくある」の4件法で求めた。

(4) 思考の制御困難性：杉浦 (2002) による思考の制御困難性の尺度を使用した。「その問題がきにかかり、なにも集中できなくなった」、「どうすれば良いのか分からなくなった」といった9項目から成る。「子どもの問題が生じた際、何かしらの対処を行った（あるいは行わなかった）結果、どのようにになりましたか」と教示し、「1全くない」から「4よくある」の4件法で回答を求めた。

結果

1. 回答者の属性

小学生群における母親の年齢は、 $M=37.88$ 、 $SD=4.71$ 、 $Max=50.00$ 、 $Min=26.00$ であった。子どもの学年は、小学1年生108名、小学2年生103名、小学3年生98名であった。子どもの性別は、男子157名、女子152名であった。

中学生群における母親の年齢は、 $M=43.51$ 、 $SD=4.83$ 、 $Max=57.00$ 、 $Min=31.00$ であった。子どもの学年は、中学1年生98名、中学2年生109名、中学3年生102名であった。子どもの性別は、男子150名、女子159名であった。

2. 小学生群と中学生群の下位尺度得点の平均値・標準偏差及び、平均値の比較

各下位尺度の合計得点を項目数で割って平均値を算出し、これを下位尺度得点とした。各群における下位尺度得点の平均値及び標準偏差を Table 1 に示す。

そして、小学生群と中学生群との差を比較するために、算出した下位尺度得点を用いて対応のない *t* 検定を行った。その結果、夫から妻へのコミュニケーション

Table 1 各群の下位尺度得点の平均値・標準偏差及び比較

	小学生 (<i>n</i> =309)		中学生 (<i>n</i> =309)		<i>t</i> 値 自由度=616
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
夫から妻へのコミュニケーション態度					
威圧	1.95	.65	2.15	.73	3.60***
共感	2.58	.70	2.40	.73	3.09**
依存・接近	2.63	.54	2.44	.60	4.00***
無視・回避	2.67	.60	2.67	.64	.05
妻から夫へのコミュニケーション態度					
威圧	1.89	.53	1.99	.54	2.44*
共感	2.72	.60	2.62	.62	1.99*
依存・接近	2.71	.55	2.56	.57	3.22**
無視・回避	2.38	.55	2.44	.56	1.25
肯定的・否定的養育行動					
関与・見守り	2.71	.45	2.59	.46	3.43**
肯定的応答	3.27	.59	3.01	.61	5.36***
意思の尊重	2.67	.44	2.66	.46	.20
過干渉	1.67	.45	1.70	.45	.96
非一貫性	2.10	.57	1.98	.60	2.55*
厳しい叱責	2.05	.59	1.91	.60	2.96**
制御困難性	2.37	.67	2.49	.67	2.28*

****p*<.001, ***p*<.01, **p*<.05

ン態度の「威圧」は小学生群よりも中学生群の方が有意に高く (*t*(616)=3.60, *p*<.001)、「共感」と「依存・接近」においては中学生群よりも小学生群の方が有意に高いこと (*t*(616)=3.09, *p*<.01; *t*(616)=4.00, *p*<.001) が示された。妻から夫へのコミュニケーション態度においても同様に、「威圧」は小学生群よりも中学生群の方が有意に高く (*t*(616)=2.44, *p*<.05)、「共感」と「依存・接近」は中学生群よりも小学生群の方が有意に高かった (*t*(616)=1.99, *p*<.05; *t*(616)=3.22, *p*<.01)。

肯定的・否定的養育行動においては、「関与・見守り」(*t*(616)=3.43, *p*<.01)、「肯定的応答」(*t*(616)=5.36, *p*<.001)、「非一貫性」(*t*(616)=2.55, *p*<.05)、「厳しい叱責」(*t*(616)=2.96, *p*<.01) のいずれも中学生群よりも小学生群の方が有意に高い値であることが示された。

最後に「思考の制御困難性」は、小学生群よりも中学生群の方が有意に高い値であった (*t*(616)=2.28, *p*<.05)。

3. 小学生群及び中学生群におけるパスモデルの検討

夫から妻へのコミュニケーション態度、妻から夫へのコミュニケーション態度、肯定的・否定的養育行動、思考の制御困難性の各下位尺度得点の Pearson の相関係数を算出した。結果を Table 2、Table 3 に示す。

次に、夫婦間のコミュニケーション態度から養育行動へ至るプロセスモデルを検討するために、パス解析を行った。本研究では、夫婦間のコミュニケーション態度の下位尺度因子が、思考の制御困難性を介して養育行動の下位尺度因子に影響するというモデルを想定している。

まず小学生群においては、相関分析において相関の見られた、夫から妻への「威圧」、「無視・回避」と、妻から夫への「威圧」から、「思考の制御困難性」へのパスを予測し、「思考の制御困難性」から「意思の

Table 2 小学生群における相関分析の結果 (*n*=309)

	夫から妻へのコミュニケーション態度				妻から夫へのコミュニケーション態度				制御困難性
	威圧	共感	依存・接近	無視・回避	威圧	共感	依存・接近	無視・回避	
制御困難性	.18**	-.10	-.03	.14*	.12*	.03	.05	.11	—
関与・見守り	-.13*	.30**	.35**	-.12*	-.18**	.35**	.28**	-.19**	-.01
肯定的応答	-.11	.26**	.33**	-.06	-.24**	.35**	.29**	-.07	.02
意思の尊重	-.04	.18**	.22**	-.09	-.15**	.22**	.14*	-.09	-.13*
過干渉	.32**	-.05	.03	.06	.28**	-.04	-.05	.18**	.20**
非一貫性	.16**	-.18**	-.11	.28**	.35**	-.13*	-.07	.30**	.25**
厳しい叱責	.16**	-.11*	-.08	.29**	.39**	-.09	.04	.22**	.24**

***p*<.01, **p*<.05

Table 3 中学生群における相関分析の結果 (n=309)

	夫から妻へのコミュニケーション態度				妻から夫へのコミュニケーション態度				
	威圧	共感	依存・接近	無視・回避	威圧	共感	依存・接近	無視・回避	制御困難性
制御困難性	.27**	-.25**	-.18**	.28**	.25**	-.11	-.10	.23**	—
関与・見守り	-.07	.14*	.18**	-.08	-.05	.24**	.15**	-.11*	.06
肯定的応答	-.13*	.14*	.19**	-.08	-.17**	.25**	.18**	-.14*	.00
意思の尊重	-.05	.06	.06	-.06	-.17**	.10	.01	.00	-.09
過干渉	.17**	-.10	-.02	.00	.28**	-.01	-.02	.09	.32**
非一貫性	.25**	-.14*	-.13*	.24**	.36**	-.18**	-.12*	.31**	.36**
厳しい叱責	.20**	-.13*	-.07	.19**	.36**	-.04	.00	.13*	.34**

** $p < .01$, * $p < .05$

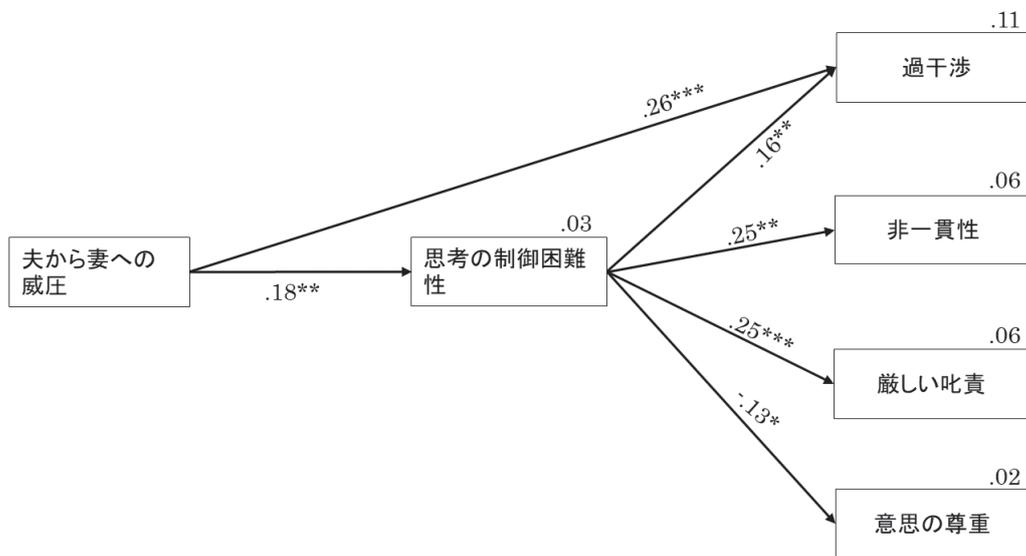


Figure 1 小学生群におけるパス図

注：数値は標準化推定値と、長方形右上の数値は決定係数を示す。
 なお、誤差変数間の共分散は省略している。
 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

尊重」「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパスを予測した。同時に、夫から妻への「威圧」から「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパス、夫から妻への「無視・回避」から「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパス、妻から夫への「威圧」から「意思の尊重」、「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパスを予測した。さらに、夫婦間のコミュニケーション態度の因子同士の共分散を想定し、パス解析を行った。次に、5%水準で有意であるパスを残し、かつ「意思の尊重」、「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」の誤差間の共分散を仮定してパス解析を行った。その結果、最終的に Figure 1 のモデルが得られた。モデルの適合度は、 $\chi^2(3)=5.37(n.s.)$ 、GFI=.99、AGFI=.96、CFI=.99、RMSEA=.05であった。Figure 1 にパスの標

準化推定値及び決定係数を示す。

次に中学生群においては、相関分析において相関の見られた、夫から妻への「威圧」、「共感」、「依存・接近」、「無視・回避」、妻から夫への「威圧」、「無視・回避」から「思考の制御困難性」へのパスを予測し、「思考の制御困難性」から「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパスを予測した。同時に、夫から妻への「威圧」から「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパス、夫から妻への「共感」から「非一貫性」「厳しい叱責」へのパス、夫から妻への「依存・接近」から「非一貫性」へのパス、夫から妻への「無視・回避」から「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパス、妻から夫への「威圧」から「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパス、妻から夫への「無視・

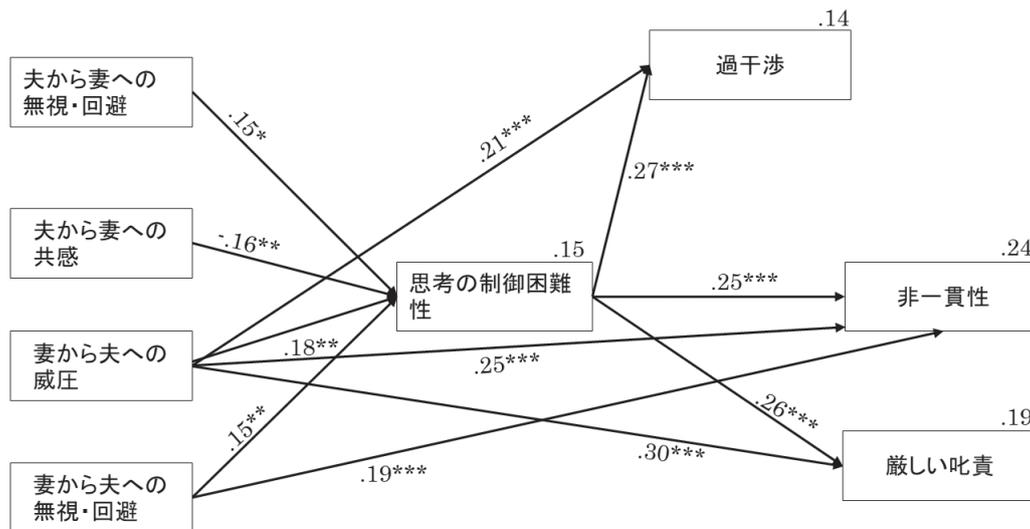


Figure 2 中学生群におけるパス図

注；数値は標準化推定値と、長方形右上の数値は決定係数を示す。
 なお、誤差変数間の共分散は省略している。
 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

回避」から「非一貫性」、「厳しい叱責」へのパスを予測した。さらに、夫妻間のコミュニケーション態度の因子同士の共分散を想定し、パス解析を行った。次に、5%水準で有意であるパスを残し、かつ「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」の誤差間の共分散を仮定してパス解析を行った。その結果、最終的に Figure 2 のモデルが得られた。モデルの適合度は、 $\chi^2(12)=40.24(p<.001)$ 、GFI=.97、AGFI=.91、CFI=.94、RMSEA=.09であった。Figure 2 にパスの標準化推定値及び決定係数を示す。

考察

1. 小学生群と中学生群における夫婦間コミュニケーション態度、養育行動、思考の制御困難性の値の比較

小学生群と中学生群の夫婦間コミュニケーション態度の下位尺度得点を比較した結果、夫から妻へのコミュニケーションにおいても、妻から夫へのコミュニケーションにおいても、「威圧」は中学生群の方が有意に高く、「共感」、「依存・接近」は小学生の方が有意に高いことが示された。このことから、子どもの成長に伴い、夫婦間で共感したり相談し合うコミュニケーション態度から、お互いを威圧するコミュニケーション態度の割合が増加していくことが推察される。結婚年数と夫婦間コミュニケーションについて検討した粕井 (2014) によると、結婚年数に伴い、妻が認識

している夫から妻への共感・接近的態度と、妻から夫への共感・接近的態度はともに減少していくことが示されている。また、妻が認識している夫から妻への威圧的態度は増加することも指摘されており、本研究の結果と一致する。結婚年数に伴い夫婦関係満足度が低下することも指摘されており (永井, 2005; 永井, 2011)、この背景として夫婦間コミュニケーションの変化があることも考えられる。また子どもが中学生の時期の家族は、それまでの時期よりも家族成員間の結びつきが低下し、家族内のストレスが増加することが指摘されている (Wakashima et al., 2011)。家族の発達に伴い夫婦間においても心理的距離が開き、共感や依存・接近的なコミュニケーションが夫婦間で減少していくことも考えられる。

また肯定的・否定的養育行動においては、「関与・見守り」、「肯定的応答」、「非一貫性」、「厳しい叱責」のいずれにおいても中学生群よりも小学生群の方が有意に高い値であることが示された。先行研究においても、男女ともに小学1~3年生の親の方が、中学1~3年生の親よりも、「関与・見守り」、「肯定的応答」の得点が高いことが示されている (伊藤ら, 2014)。子どもが小さい時期の親子関係は、親が子どもを保護し養育するという質的特徴があるために (落合・佐藤, 1996)、「関与・見守り」や「肯定的応答」の得点は小学生群の方が中学生群よりも高いことが考えられる。一方で、伊藤ら (2014) においては「非一貫性」

の値は、中学1～3年生の子どもの親の方が、小学1～3年生の子どもの親よりも高い値であった。本研究においては、小学生群の方が中学生群よりも高い値となっており、異なる結果となった。

最後に思考の制御困難性は、小学生群よりも中学生群の方が有意に高い値であることが示された。先述したように、中学生の子どもを持つ時期における家族はストレスが高くなることから (Wakashima et al., 2011)、母親自身が子どもへの対応に困惑し対応しきれないと感じているために、思考の制御困難性が高いことが考えられる。

2. パスモデルの検討

パス解析の結果、夫婦間のコミュニケーション態度が思考の制御困難性を介して養育行動に影響することが示された。小学生群においては、夫から妻への「威圧」が直接的に「過干渉」を説明しており、また「思考の制御困難性」を介して「意思の尊重」、「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」を説明していた。適合度の指標を見ると、 $\chi^2(3)=5.37(n.s.)$ 、 $GFI=.99$ 、 $AGFI=.96$ 、 $CFI=.99$ 、 $RMSEA=.05$ と十分な値であることから、このモデルは支持されたと考えられる。また中学生群においては、妻から夫への「威圧」が直接「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」を説明し、妻から夫への「無視・回避」が直接「非一貫性」を説明していた。そして、夫から妻への「無視・回避」と「共感」、妻から夫への「威圧」、「無視・回避」が「思考の制御困難性」を介して「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責」を説明していることが示された。適合度の指標を見ると、 $\chi^2(12)=40.24(p<.001)$ 、 $GFI=.97$ 、 $AGFI=.91$ 、 $CFI=.94$ 、 $RMSEA=.09$ であることから、このモデルも支持されたと考える。

以上のように、小学生群及び中学生群どちらにおいても、「思考の制御困難性」を媒介とし、夫婦間コミュニケーション態度が養育行動に影響することが示されたことから、仮説は支持されたと見える。特に「思考の制御困難性」を媒介変数として設定したことで、「非一貫性」、「厳しい叱責」といった否定的養育行動への夫婦間コミュニケーション態度の影響が示されたといえるだろう。すなわち、夫婦間のコミュニケーションにより母親の思考の制御困難性が高まることは、否定的な養育行動を予測することが示された。思考の制御困難性は「その問題がきにかかり、なにも集中できなくなった」、「どうすれば良いのか分からなくなった」などの項目であり、思考の制御困難性が高

まった状態は、子どもの問題が生じて混乱し対応に自信が持てず対処可能性を低く認識している状態であると考えられる。子育てにおける対処可能性の低さが怒り・嫌悪を高めることで不適切な養育に影響する (中谷, 2015) ことから、母親が思考の制御困難に陥っている状況は、不適切な養育とされる厳しい叱責に影響することが考えられる。また、どのように対処したらよいかわからず対処に自信が持てないことで、一貫性を欠いた非一貫的な養育行動となることが考えられる。さらに、過干渉への影響も示された。思考が制御困難となり問題に対しての気がかりが続くことで、子どもの行動に対し敏感に反応し過ぎてしまい過干渉に至ることが考えられる。

また、小学生群、中学生群どちらにおいても、過干渉は夫婦間のコミュニケーション態度から直接的な影響があることも示された。これは、夫婦関係が悪くなると同時に母子の密着が生じることが背景としてあると考えられる。夫婦間の結びつきが弱くても母子間の結びつきは強いこと (板倉・長谷川, 2012) が指摘されている。夫婦間の葛藤を補うように母子関係がシステム的に結びつきを強めていることが考えられる。

そして、小学生群と中学生群では、「思考の制御困難性」へ影響する夫婦間のコミュニケーション態度は異なることが示された。

まず小学生群においては、夫から妻への「威圧」から「思考の制御困難性」へのパスが示された。夫婦間コミュニケーションの非対称性と夫婦関係満足度は負の関連があること (Whisman & Jacobson, 1990) から、夫からの威圧を感じている状態においては、妻は夫への不満やストレスを感じている状態であることがうかがえる。また、杉浦 (2002) は、未解決感と考える努力が、問題焦点型対処方略と思考の制御困難性の関連を媒介することを指摘している。父親が母親に威圧的なコミュニケーションをとっている場合、母親は父親に子育ての問題を相談したり頼ることができず未解決感が高まり思考の制御困難性に影響することが考えられる。特に、子どもが小学生の時期の母親の精神的健康度は他のライフステージの母親よりも低いことが指摘されており (狩野, 2018)、母親にとっては課題の多い子育てのライフステージといえよう。子どもの小学校という新しい環境への移行や小学校との関係の構築といった課題への直面 (田附, 2019) が考えられる。こうした課題がある中で、父親から威圧的なコミュニケーションがとられることで、母親は父親に対

して相談することができず子どもの問題を一人で抱えてしまい、どうしたらよいかわからなくなることが考えられる。加えて中谷・中谷(2006)は、不適切な養育行動の要因として、母親の自尊感情の低さや育児ストレスの高さからもたらされる被害的認知があることを明らかにしている。父親から見下された態度をとられる威圧的なコミュニケーションは、母親にとって自尊感情を低下させ、また思考を制御困難にすることで、不適切な養育へと影響していることが考えられる。

中学生群においては、夫から妻への「無視・回避」と、妻から夫への「威圧」「無視・回避」が「思考の制御困難性」を高め、反対に夫から妻への「共感」が「思考の制御困難性」を低めることが示された。中年期夫婦において、威圧・回避的なコミュニケーションをとっている妻は、夫婦関係満足度は低く離婚思念度が高いことが指摘されている(平山・柏木, 2004)。また、子どもの成長や結婚年数に伴い夫婦関係満足度が低下すること(永井, 2005; 永井, 2011)や、*t*検定の結果よりコミュニケーションの質が変化することも踏まえると、子どもが中学生の時期になり夫婦が協働して子どもの問題に当たらない、あるいは父親に頼らずに母親が対応していく状態となり、一人で子どもの問題に対処しきれなくなることで否定的な養育行動につながる事が考えられる。特に、子どもが思春期になるにつれて家族内のストレスが増加していく中で(Wakashima et al., 2011)、父親を含む家族成員とのコミュニケーションが減少していくことも考えられる。そのような中で生じる多様な子どもの問題について、対応ができない状態に陥っていることが推察される。関係の満足度が低い夫婦は、支配や要求が高く、建設的な解決策の提案が少ない(Woodin, 2011)ことが指摘されており、夫婦間でのコミュニケーションの回避や相手に対する威圧的なコミュニケーションが見られる夫婦においては、子どもの問題についても話し合い等による建設的な話し合いとならず、いつまでもどのように対処すればよいかわからず考え続けるような状態になることが推察される。

以上のように、本研究では、夫婦間コミュニケーション態度が思考の制御困難を介して養育行動へ影響することが示された。こうした否定的な養育行動の背景として、母親がどのような家族成員間の関係性の中に置かれているかを考慮する必要があるだろう。

3. 今後の課題

本研究では、母親側の視点からモデルの検討を行っ

たが、今後は父親についても焦点を当てる必要があるだろう。また、認知的変数として思考の制御困難性を用いたが、原因帰属や期待といった変数を用い、夫婦関係を背景とした母親の不適切な養育行動にさらに焦点を当て検討を行うことが必要であろう。

注

* 愛知県立大学教育福祉学部講師

引用文献

- Amato, P. R. & Fowler, F. (2002). Parenting practices, child adjustment, and family diversity. *Journal of Marriage and Family*, **64**(3), 703–716.
- 荒牧美佐子・無藤隆. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, **19**(2), 87–97.
- Bugental, D. B., Ellerson, P. C., Lin, E. K., Rainey, B., Kokotovic, A., & O'Hara, N. (2002). A cognitive approach to child abuse prevention. *Journal of Family Psychology*, **16**(3), 243–258.
- Carlo, G., Mestre, M. V., Samper, P., Tur, A., & Armenta, B. E. (2011). The longitudinal relations among dimensions of parenting styles, sympathy, prosocial moral reasoning, and prosocial behaviors. *International Journal of Behavioral Development*, **35**(2), 116–124.
- Dadds, M. R., Mullins, M. J., McAllister, R. A., & Atkinson, E. (2003). Attributions, affect, and behavior in abuse-risk mothers: A laboratory study. *Child Abuse & Neglect*, **27**(1), 21–45.
- 土居正人・三宅俊治. (2018). 親子関係が自傷行為傾向に与える影響. *心身医学*, **58**(5), 423–431.
- Gadeyne, E., Ghesquière, P., & Onghena, P. (2004). Longitudinal relations between parenting and child adjustment in young children. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **33**(2), 347–358.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次. (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証. *発達心理学研究*, **25**(3), 221–231.
- Halford, W. K., Keefer, E., & Osgarby, S. M. (2002). “How has the week been for you two?” Relationship satisfaction and hindsight memory biases in couples’ reports of relationship events. *Cognitive Therapy and Research*, **26**(6), 759–773.
- Haskett, M. E., Scott, S. S., Grant, R., Ward, C. S., & Robinson, C. (2003). Child-related cognitions and affective functioning of physically abusive and comparison parents. *Child Abuse &*

- Neglect*, **27**(6), 663–686.
- 平山順子・柏木恵子. (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？. *発達心理学研究*, **12**(3), 216–227.
- 平山順子・柏木恵子. (2004). 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連. *発達心理学研究*, **15**(1), 89–100.
- 堀口美智子. (2006). 乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度. *家族社会学研究*, **17**(2), 68–78.
- 板倉憲政・長谷川啓三. (2012). 青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究. *対人社会心理学研究*, **12**, 85–91.
- 狩野真理. (2018). 育児期のライフステージからみた母親のメンタルヘルス—夫婦ペアデータによる検討—. *女性心身医学*, **23**(2), 123–130.
- 粕井みづほ. (2014). 夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い. *日本家政学会誌*, **65**(2), 50–56.
- Krishnakumar, A. & Buehler, C. (2000). Interparental conflict and parenting behaviors: A meta-analytic review. *Family Relations*, **49**(1), 25–44.
- McElroy, E. M. & Rodriguez, C. M. (2008). Mothers of children with externalizing behavior problems: Cognitive risk factors for abuse potential and discipline style and practices. *Child Abuse & Neglect*, **32**(8), 774–784.
- McGoldrick, M., Garcia Preto, N., & Carter. B. (2016). *The Expanding Family Life Cycle The Individual, Family, and Social Perspectives*, 4th ed. Allyn and Beacon.
- McLeod, B. D., Weisz, J. R., & Wood, J. J. (2007). Examining the association between parenting and childhood depression: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, **27**(8), 986–1003.
- Milner, J. S. (1993). Social information processing and physical child abuse. *Clinical Psychology Review*, **13**(3), 275–294.
- 永井暁子. (2005). 結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化. *季刊家計経済研究*, **66**, 76–81.
- 永井暁子. (2011). 結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化. *社会福祉*, **52**, 123–131.
- 中谷奈美子. (2015). 子どもの行動に対する母親の帰属と不適切な養育—感情を媒介として—. *心理学研究*, **87**(1), 40–49.
- 中谷奈美子・中谷素之. (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. *発達心理学研究*, **17**(2), 148–158.
- 難波茂美・田中宏二. (1999). サポートと対人葛藤が育児期の母親のストレス反応に及ぼす影響. *健康心理学研究*, **12**(1), 37–47.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. *教育心理学研究*, **44**(1), 11–22.
- Pedro, M. F., Ribeiro, T., & Shelton, K. H. (2012). Marital satisfaction and partners' parenting practices: The mediating role of coparenting behavior. *Journal of Family Psychology*, **26**(4), 509–522.
- Rodriguez, C. M., Silvia, P. J., & Gaskin, R. E. (2019). Predicting maternal and paternal parent-child aggression risk: Longitudinal multimethod investigation using social information processing theory. *Psychology of Violence*, **9**(3), 370–382.
- Sillars, A., Roberts, L. J., Leonard, K. E., & Dun, T. (2000). Cognition during marital conflict: The relationship of thought and talk. *Journal of Social and Personal Relationships*, **17**(4–5), 479–502.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則. (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連. *教育心理学研究*, **50**(2), 129–140.
- 杉浦義典. (2001). ストレス事態に関する思考の制御困難性と関連する対処方略. *教育心理学研究*, **49**(2), 186–197.
- 杉浦義典. (2002). 問題焦点型対処方略と思考の制御困難性の関連. *教育心理学研究*, **50**(3), 271–282.
- 田附あえか. (2019). 第6章 小学生の子どもとその家族—現代の「児童期」を考える—. 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子(編) *家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助—* [第2版]. 有斐閣, pp. 87–100.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二. (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響. *教育心理学研究*, **45**(2), 173–182.
- 上田公代. (2007). 乳児を持つ母親の育児に対する否定的感情と子育て支援に関する研究. *熊本大学医学部保健学科紀要*, **3**, 25–35.
- 氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光・山本ちか・島義弘. (2010). 夫婦関係が中学生の抑うつ症状におよぼす影響：親行動媒介モデルと子どもの知覚媒介モデルの検討. *発達心理学研究*, **21**(1), 58–70.
- Wakashima, K., Kozuka, T., Itakura, N., & Usami, T. (2011). Simultaneous and cumulative family relationship: Examining with ICHIGEKI. *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, **1**(2), 104–110.
- Whisman, M. A. & Jacobson, N. S. (1990). Power, marital satisfaction, and response to marital therapy. *Journal of Family Psychology*, **4**(2), 202–212.
- Woodin, E. M. (2011). A two-dimensional approach to relationship conflict: Meta-analytic findings. *Journal of Family Psychology*, **25**(3), 325–335.